50 年近く前に、群馬県の上野村を通過した。とってもいい感じがする村だった。それ以降しばしば滞在するようになりました。そのうち住むのもいいかなあと思ったが、仕事の都合もあり 1 年じゅう住むわけにはいかない。村にいたり東京にいたりという生活を続けています。上野村は、8 月のお盆の頃になると日航機が墜落したというニュースが出てくる。その村です。上野村と比べると足助が都市に見えるくらい、山奥です。村の中に水田が一枚もないというそういう村。かつては養蚕が中心でそれなりにやっていた村。村の９６％が森林。

明治になって上野村ができてから、一度も合併したことがない。現在の人口が 1256 人くらい。上野村ができた時は 1000 人くらい。今の人口で多いか少ないのかよくわからない。1256 人といっても２６０何人かは、Ｉターンの人ということになる。人口の 2 割以上はＩターン。村の人間はＩターンという言葉は使わない。というのは、元から地域社会には外から入ってくる人がたくさんいた。例えば、お嫁さんはどこからきたのか。村の中からお嫁さんが来たというケースもあるが、結構村外から来てますし、かつては養子という形で外から男の人が入ってくることもたくさんありました。だからＩターンは新しい現象ではなくて、昔から外から人が入ってきて、時にはお嫁さんだったり養子さんだったり。昔は行商やなんかで村に来て住みつく人もいました。地域社会というのはそうやってできていくもんで、今日Ｉターンとわざわざ言うのも変な話で、村のなかでは使わない言葉ではあります。ただうちの村でＩターンの人がかなり多いのは確かで、農山村という場所は、安心はできないんだけれど、比較的よそからは持続性のある村というふうに思われている。高齢化率は３８％くらいあるけど、比較的若いひともいて、だいたい 1200 人くらいの村だと、新生児は 1 人か 2 人しか生まれないのが、うちの村はだいたい 10 人くらい。群馬県の市町村の中では、別に結婚しなければいけないわけではないんだけれども、婚姻率も 1 位。出生率も２．２ある。群馬県内で 1 位。どっちかというと比較的なんとかなりそうな村と思われている。もちろん今の状況ですから、何といっていてもたちまち窮地に陥るというようなこともありますけど。

もうひとつ自慢話的に言うと、1 年半くらい前に、中学生の意識調査を教育委員会がやって、その質問項目のなかに、「将来どこで暮らしたいか」というのがあった。関東の村ですから、東京が相当いるだろうなと。群馬県内にしても、高崎とか前橋とか、さらに今日の状況ですから、少数派としてはニューヨークとか、そういうことを言う子も若干いそうだと思っていたところ、アンケート結果を見たら１００％上野村と答えて、僕らの方が「え！ひとりも出て行かないの？」とそんな感じ。あてにはならないと思っていますけど、今のうちの村は

そんな感じがあって、経済的には決して豊かではない。貧乏な村といっても構わないと思うんですけど、村の雰囲気としては、ここが暮らすのに一番いい村、そんな雰囲気が村中に広がっていることもあります。

50 年近く前に上野村に出会ったときと比べると、いろんなことが変わってきている感じがする。当時は、山村は「暗い社会」というイメージが強かったし、封建的なものが残っているみたいな言われ方をすることがよくあった。今日は、山村は「色んな歴史や人間たちの知恵や技や色んなものが残っていて、むしろ結構おもしろそうな場所」というふうに見る人が多くなってきた。村のほうも随分変わってきて、僕の村でいうと 2 割強がＩターンのひとたちということになる。比較的早くからそういう人たちが入ってきたところ。そういう地域としては、そろそろＩターン的なひとたちの勧誘の仕方も考えていかないといけないかなと、そういう時代にちょっと入ってきているかんじもある。うちの村ですと 1980 年くらいからＩターンという形で入ってくるひとたちがいたんですけど、当時は村に引っ越してくることはハードルが高かった。例えば上野村に引っ越したいなんて言ったって、周りのひとは皆反対する。そういうなかで押し切ってこないといけない。そうすると色んなことを考えて、色んなことを決意してというかんじで入ってきたんですけど、最近のひとは、「田舎暮らし」ということがごく普通の現象になってきた。そのために結構ハードルが低い形で入ってくるかんじに移ってきた。逆にうちの村は、最近入ってきたひとがまた村外に出ていくというケースがちょっと増えてきたというかんじ。昔入ってきたひとは、しっかり残っていて、つまりハードルが低くなってきているもんだから、ふらっと気軽に来て、来てみたら自分の予想と違うことがある、そうすると気軽に出て行っちゃう。それから、もっと条件のいいところを探して就職活動のように引っ越してしまうひととかというのが若干発生している。Ｉターンのひとたちからも「Ｉターン政策をそろそろ考えなおすべきだ」という意見が出てきている。村に来て何がしたいのか、というので入ってきてくれないと「田舎暮らしがしたい」という人はもういいんじゃないかということを、うちの村でも言っているし、よその村でも出始めている。一番すごいなぁと思うのは、徳島県の神山町とか、島根県でもありますけど、そういう一部地域では、Ｉターンで来たいという人に対して「村に来て何がしたいのか、企画書を持ってきてくれ」。面接やったうえで「この人大丈夫」となると、「来てくれ」と。企画書があやふやで「田舎暮らし希望」のような人は、「結構です」というような地域がではじめている。雰囲気が変わってきているんで、地域社会の側も何か考えなければならないというふうになって来ている。

山村と、山村を取り巻く状況はそんなふうに、結構激しく変動しているという気がしていて。地域社会の在り方自身はそんなに変わっているわけではないんですけれど。山村をとりまく状況や、人々の山村への視点とか、それに対応したやり方をそろそろ考えなきゃいけないかという時代に来ています。

１．はじめに
―個人の競争をとおして豊かな社会をつくるという考え方は、何をもたらしたのか

近代社会というのは、個人が競争を通して、結果社会全体が豊かになっていくというモデルで動いていた。しかしそれが今になってみると本当だったんだろうかという疑問が出てきている現状。歴史をふりかえってみると、ヨーロッパにおいて近代社会が形成されてきたのは 18 世紀。その時期をみていくと、ひとつのことをめぐって結構大きな対立があった。人間たちは個人として自己を確立して、個人として働いて、個人としてがんばって、それを理想とする考えだった。でもそうではない考え方もたくさんあって、色んな意味で共に生きるという方法を考えるひとたちがいた。協同組合が生まれてきたり、初期の労働組合も共に生きるっていうことを考えながら組織を作っていった。

２．個人の社会に対する幻想はなぜ成立したのか
―ヨーロッパ近代形成期の「個人」と「協同」の対立

ヨーロッパの近代形成期は個人の社会を目指そうとする動きと、個人の社会になってはいけないという、むしろ人間たちはともに生きる世界を作らなきゃいけないという 2 つの考え方が対立しながら展開したというのがこの時期の動きだったという気がします。ただ、その後の歴史をみていくと、個人として生きていくということが色んな問題があったにも関わらず、問題が顕在化しなかったと言ってもいい。

―先進国が世界の富を独占したとき

なぜそれが可能だったかというと、世界の構造の問題で、1970 年くらいまでは、世界の富が全て先進国に集中するという世界だった。1973 年にオイルショックが起きますけど、それ以前だと、油はほとんど水と同じくらいの価格で、先進

国は手に入れることができましたし、しかも生産力を持っているのは先進国だけだった。実際、つい 30 年くらい前ですと、自動車の生産が、海外で売るほどできる国というのは、日本、イギリス、アメリカ、フランス、イタリア、ドイツ、スウェーデンくらいのほとんど 7 か国くらいで世界の自動車生産を独占していた。これはあらゆるものにいえた。電化製品だって、もう少し作っている国は増えますけど、それにしても先進国しかできない。そういう構造になってから、先進国はただ同然の資源を手に入れて、自分たちで世界の富を独占するという市場構造が出来上がっていた。それはその国の企業が成長し続ける基盤をつくったということでもあるし、国のほうからみれば財政規模が膨らんでいく、ふくらんでいく財政規模を使って、個人の社会の問題点みたいなものをある程度社会保障的にカバーしていく。完全な形でカバーできたかは別問題ですが。そういうようなことがある程度やることができた。それが 1970 年代中盤くらいまでの世界の在り方だったというふうに思える。

―先進国の富の独占の終焉と個人の社会の幻想の崩壊

ところが先ほど言ったように 1973 年だったと思いますけど、アラブの産油国が団結をして、第 1 次オイルショックという原油価格の大幅な値上がりが発生する。さらに 1980 年代くらいになってきますと、中国も含めていろんな国で経済発展が図られていくという時代になってきた。今日になれば、例えば日本周辺だけを見ても、さっきの自動車でいえば、世界最大の生産国は中国に移っていますし、日本にはあまり入ってきていないですけど、お隣の韓国は世界中に車を輸出しているということになっていますし、作っていることでいえば、ちょっとだけ台湾も作っているし、ただ台湾の場合は電子関係中心でやっているんで、あまり車を作る気がない。ちょっとだけ趣味的に作っているかんじですけど。フィリピンでも作っている、ベトナムでも作っている、インドネシアでも、マレーシアでも作っている、タイも作っている。簡単に言えば、車なんかどこでも作っています、というそういう時代に移行をしてきた。そういう中で、車以外のあらゆるものが世界中で生産されるようになった。途上国で生産されるものでいうと、安かろう悪かろうと、最初はだいたいそうなんですけれど、あっという間に追いついてくるっていう感じです。今日かばんのなかにパソコンが一台入っているんですけれど、もう 5 年くらい使っている持ち運び用のパソコンですけれども、そこに貼ってあるラベルを見るとＮＥＣと書いてあるんですけれど、実際には中国のレノボが作っているパソコンです。レノボが作ったやつをＮＥＣというラベルをはってＮＥＣに渡して、ＮＥＣが販売しているっていうだけのことで、中身はレノボ製です。なんでそれを買ったのかというと

それが一番軽いパソコンだったから。持ち運び用に大変便利なんです。それから５年近くも使っているんですけど故障らしきこともない。なんの遜色もありません。というかんじ。それは当たり前で、パソコンなんかはいい部品を使ってくれれば安定性のいいものができますし、逆に悪い部品を使われちゃうと、２，３年たつと悪い動作が出てきちゃったり。それだけの話。レノボのパソコンだから安いかっていうとそんなこともなくて、結構値段は良い値段とる。ただ信頼性の高い部品を使っているので、それを買って見たら、悪くないというかんじ。今は使っていく部品が世界市場に流れていますし、さらには技術者でさえ外国から雇うとかいう時代に移って来ちゃったので、あっという間に途上国だと思っていたものが日本で作るものと遜色ない。そういうことが起きてしまう時代に移ってきた。そうなると、世界中で同じようなものが生産されてしまうことになるわけで、市場を通した大競争時代に突入してしまう。かつてのように先進国が、富を独占する時代が終わってしまった。そうすると富を独占して自分のところが大きな収益性を持っているがゆえにできたことが段々できなくなってくるということが発生してくる。

―近代的なシステムの価値の劣化

結局今、先進国はどこの国に行ってもそうですけど、格差社会が広がっていたり、社会保障レベルの引き下げが各国で議論されていたり、簡単にいえば今日本で議論しているようなことがそこらじゅうで行われている時代に移って来ちゃった。かつての途上国とかが、だんだん生産力をつけているのは大局的に見れば悪いことじゃない。世界の不平等が解消されていくと思うことができる。先進国からするとかなりつらい時代に入ってきた。それが現状だろうという気がします。このことによって、先進国がこれまで享受できてきたようなことが段々できなくなって、そうすると個人の社会の問題点を財政的に支えていくようなことが劣化してきてしまう。そうすると結局、個人の社会が持っている限界感とか、そういう社会の劣化とか、そういうものが前面に見えるようになってしまうというのが、今日という気がしています。ですから今日の状況ていうのは、近代的なシステム自体がだんだん価値を失っていくという、それがいろんなレベルで起きていくんだろうという気がしています。

３．現代世界におけるふたつの動き
―これまでの世界に戻ろうとする動きと「強い国家」への願望

そういうことであるからこそ、先進国のなかからは、何でもいいからもとの強かった時代に戻してもらいたいというひとたちも登場してくる。ある意味ではそういうひとたちの後押しで当選できたのが今のトランプ政権といってもよくて、もう一度偉大なアメリカを取り戻すみたいな、そういうことに期待をするひとが当然ながら一定程度出てくる。それからヨーロッパなんかでは、強い国を取り戻すっていうのが国家主義の台頭として出てくる。いろんな国で、国家主義的な勢力が段々力をつけてくる。そういうことでもあったりする。それが全てかっていうとそうでもなくて、もう一度近代社会の入り口にあった問題提起を見直してみる。そうすると、個人の社会を作っていこうとする動きと、それを押しとどめて、共に生きる社会を作っていこうとする２つの動きがあったといっていいわけで、もう一度この辺りを見直しながら自分たちでもう一度、ともに生きる社会を作れないんだろうか、そういう模索っていうのが、片方ではいろんな国のなかで進行していく、そういう時代でもある。

―ともに生きる社会をつくろうとする動き

私は日本との比較地としてフランスを使ってきたので、フランスだけに関していえば、過去に 30 回くらい行った気がしますが、結構よく参りました。フランスもはっきり言えばパリだけに関していえば、景色はちょっと違うけど、中身は東京みたいなもんです。名古屋っていっても同じことですけど。だいたいどこの国にいっても首都っていうのは一番つまんないとこなんですけど、買い物するにはいいけれども、と、そんなかんじのところで、決して滞在していて面白いところではないっていいますか、やっぱり便利さ、効率、そういうものが支配している社会。ところがフランスでも農山村地域に行きますと、かなりいい農村がありまして、私は上野村に行ったのも、魚釣りが出発点の人間なんで、むこうに行きましても、やっぱり魚を釣りたい場合があって、はじめて行った時にはセーヌ川で釣りをやってみたんですけど、ちっとも面白くなかった。魚はいて、日曜日には結構釣っているひともいるんですよ。だけど僕としては面白い釣り場ではなかった。結果としては、農山村地域に遠出をしては釣りをするということをやっていました。結果としてはフランスの農山村を随分歩くことになっている。釣り場として一番好きなのはスペイン国境に近い、ピレネーの山の中。今、フランスの農山村地域ってどんな状況なのかというと、実は村に住んでいるひとたちの人口のだいたい２/３くらいは、1975 年以降に引っ越して来た、日本的にいうとＩターン者。ですからフランスの場合は、実は 20 世紀の歴史っていうのは、農山村が急激に過疎化した歴史でもあったんです。かつて、教科書的な本を読みますと、フランス農業は日本の農業と比較的似ている

と書いてあったんです。当時、日本の農業はだいたい１ヘクタールくらいを自分の畑・水田なんかにしているような農民が多かった時代。そういうときにフランスとしてはだいたい２～３ヘクタールの間くらい。それくらいの自営農民。ただ、むこうの場合は畜産農家っていうのがかなりたくさんいます。畜産農家だと、かなり広い放牧地を持ったりします。そういうひとたちを含めて、２～３ヘクタールですから、比較的日本と似た、小規模自営農民中心の農村を作っているという風にかつては書いてあった。戦後になりましてフランス政府は急激な農地規模拡大をやりましたので、現在どのくらいかというと統計的には６８ヘクタールくらいです。ただ各戸とすると１００ヘクタールと思ってもらって構わない。なんでかっていうと、大規模化しない分野があるから。フランスの場合にぶどうを栽培してワインを作っている農家が結構いますけれど、ワイン農家からすると、面積を広げてレベルの低いワインを作るよりもむしろ狭い面積でいいブドウを作っていいワインを作るほうがずっと収益性がいい。だから今でもワイン農家は３ヘクタールくらいでやっているところがほとんどという感じです。それからもうひとつ、伝統的にはフランスの野菜というのは、農家が近くの都市に自分で持って行って売ってしまうという、産地直送みたいなかんじの形式がもともとで、今でもパリの街なんかでも、例えばここの通りは月曜日と木曜日の午前中は通行止めになりますよ、と道を閉鎖して、そこに市がたつ。パリなんかになりますと、農民が直接持ってくるって言うよりも、農民から請け負って業者さんがやってくるというかんじではあるんですが、一種の産直的な売り方。ただ、最近のパリは、だんだんスーパーマーケットのシェアが高くなってるんで、日本と同じような売り方、がだんだん増えてきてはいるんですが、伝統的には農家のひとたちが自分たちで作ったものを市に持って行ってるという形式が非常に多かった。今でもそれをやっている農家さんは結構いて、一人でやっているかグループを組んでやっているか、持っていく以上、いろんな種類の野菜を持っていかなきゃいけないんですけど、グループ組んでやったりするんですけれど、野菜を多品種少量生産やっていくとなると、とてもじゃないけど何十ヘクタールもできるはずがない。こういう農家はだいたい２，３ヘクタールくらいでやっている。だからそのふたつ、ワイン農家と野菜を多品種少量生産している農家を別にしちゃうとだいたい 100 ヘクタールくらいの規模で農業をやっている。そうすると、農家数からいうと 50 分の１とか減少してしまっている。それがフランスの農山村の急速な過疎化を招いている。1975 年くらいまでの特に戦後の過程では、今日本で騒がれてるような過疎化とはレベルが違うくらい過疎化した。だいたいどこの地域でも人口が 10 分の１になっている。そんなかんじだったんですね。

―フランス・イタリアのローカリズム、英米の従業員共同所有事業体

ところが 1975 年くらいになぜか雲行きが変わってきて、都市から農山村に引っ越すひとたちが発生してきた。ではじめは少なかったんだけれど、80 年代以降くらいになると、普通の選択肢くらいににになってきた。ぞくぞくとやってきたと言ってもいいくらい。だから僕の行った村にも住宅が足りなくて、日本でいうと村営住宅を一生懸命作って対応してりしてるんですけど、ですからこの３０、４０年くらいでいうと、だいたいどこでも人口増加していて、あっというまに色んなひとが来ちゃったもんだから、元のひとと、新しいひととの人口差が逆転してしまった。だいたい今のフランスだと 2/3 くらいが都市から来た人といっても間違いない。地域差は多少ありますけど、少なくとも半分くらいはそんな感じでした。多い所だと半分くらいが都市出身者。だから村で会話していても、例えば僕がそこの村にぶらっと行って、だいたい最初に聞かれるのが「どっから来た？」ていう話になるわけなんですけど、「僕は日本から来た」とこういうと、「私は 5 年前にパリから来たの」とか「リールの工業地帯から引っ越してきて、いま 10 年目を迎えている」とかですね、そういう会話がごく普通っていうそういう時代に、むこうは移ってきたという感じです。結局その中で、引っ越してきたひとたちに、僕が聞くのもちょっと変なんですけど、「どうしてこんな辺鄙なところに引っ越してきたの？」ととりあえず質問してみますね、そうするとみなさん同じ答えを持っているんですけど「人間的な暮らしがしたかった」と言ってくる。じゃあ「人間的な暮らしって何なんですか？」ととりあえず質問してみる。そうすると皆さんおっしゃるのは「自然があってこそ人間的な暮らしができる」。これは農山村に引っ越して来た人たちですから、そういう気持ちを持った人が来ているというのはあるんでしょうけど、それが答えのひとつ。もうひとつその人たちが言うのは、例えば私は何年前までパリにいた、仮にパリにいて、会社に出勤しようとして、道を歩いていて、仮に急に心臓が苦しくなって倒れて、そのまま死んでしまったということが発生してしまったとする。パリ人にとっては、こんなところで死ぬなよな、ゴミがひとつ増えたみたいな、私が死んだことに対して、パリ市は痛くもかゆくもない。家族とか友人とかのなかでは、惜しい人がなくなったっていうことになるかもしれませんけど、町のなかでは、結局いてもいなくてもどうでもいい。仮に自分がひとり減ったとしても、ひとり入ってくればおんなじことなわけで、つまりその程度の価値しかない。会社でもおんなじで、かつては結構大きい会社にいた。それで仮に私が急に死んでしまったとしても、会社は痛くもかゆくもない。で、引きつぎかなんかで、２，３日混乱はするかもしれないけど、1 週間もすれば何事もなかったかのように当たり前のように動いている。つまりこれだけ人間の

価値がないんだ。ということをよく耳にする。価値の無い人間として生きていくのに、もう嫌になった。やはりちゃんと価値のある人間として生きたい。価値があるためにはどうしたらいいかと言うと、やっぱり関係がしっかりできている。さっき言った「家族のなかでは価値がある」のは家族のなかには関係ができている。その関係のなかでは、かけがえのないお父さんだったり、かけがえのないお母さんだったり、親友だったりする。だけどパリの町のなかでは関係の見えない一個人。実は企業のなかでも関係の見えない一個人。そうなってしまうと、急にあの世にいってしまうとしても、何事もなかったかのような形で展開してしまう。結局しっかり関係のなかで生きていける世界を探したという。それが農山村だったんだという話です。ちなみに、フランスは人口でいうと日本の半分強くらいかなというくらいですが、市町村でいうと 3 万 6 千５００いくつですから、日本の人口だったら 7 万くらいあってもいいというくらいの市町村の数なんです。で、僕がちょっと遊びにいくような村だと、だいたい人口 100 人から 200 人くらいで、１つの村を作っているのが普通。だけどそこには役場があって、村長さんもいて、議会もある。だけどそこで役場職員さんはというと、そのクラスだと大体 1 人ですね。役場にいくと、女性がひとりでポツンと座っているみたいなそんなかんじです。ちなみに、市町村長さん、日本だと、副市町村長さんとか出納長さんとか、議会の議員さんとか、すべて無給です。これはヨーロッパではこれが普通で、ドイツでは出納長を有給にしていて、それがむしろ例外くらい。ただ、フランスの場合は、人口 30 万を超えた市には、市長さんたちに給料とは別の名目で、給料らしきものが出ているという感じなんですけども、実は、全員、ほとんどのところの人が無給でやっている。ですから現役世代の人が村長さんになったりすると、ウィークデーの昼間は自分の仕事をしていますんで、だいたい夕方になって役場に出てきて、あとは土日にでてきている。議会はやっぱり夜にやるので、無給ですから、昼間は自分の仕事をやってなきゃいけないひともいるので、すべて夜開く。むこうにいると、「日本って市町村長に結構給料払っているんだって？」と聞かれて、今、日本の状況って結構流れています。それで「払っている」いうと、「なんで払わなきゃいけないんだ」って聞かれて、改めて聞かれると「なんでだっけ」って気になりますけど、しょうがないから「歴史がちがうもんで」とか言っているんですけど。別に市長の給料をただにしろと言っているわけではないんですけど、世界的にみるとそういうところ結構多いんですよね、という話です。さっき言ったようにそういう無給の市町村長さんとか、議員さんとかいて、役場の職員さんひとり。地方分権はかなり進んでますんで、それで地方自治できるんですかという話になるんですけど、実は日本でいうと役所にいて、係長がいるくらいで、住民がＮＰＯ組織を作って全て請け負っている形になっている。で

すから人口 150 人くらいの村に２０くらいＮＰＯ組織があったりします。村長さんとか議員さんは選挙で選ばれますので、例えば地域づくりの方向性なんかでも、そのときの選挙公約なんかもありますので、これからの自分の村はこういう方向でいきたいということを訴えて仮に当選した。これは基本的な方向性を出しているだけなんですね。ではこの方向性に従って具体的にどうするというかということになると、地域設計をするＮＰＯの人たちが受け持つという感じになって。ですから地域づくりＮＰＯみたいなものが、地域計画から作っていくというかんじ。で、あるいは、道路管理ＮＰＯみたいなものがあったりして、市の土木課みたいな仕事をしているんですけど、普段は大してやることがなかったりするんですけど、やっぱり大雨が降ったりすると道の見回りにいったり。それでどこか崩れたりすると、修理を依頼したりとか、そんなようなことをやったりもしている。小学校は市町村管理なので、フランスの場合。教育委員会じゃなくて市町村が直接管理です。そうすると学校の管理運営のＮＰＯができて、それが教育委員会のようなＰＴＡのような感じなんですけど、学校の先生たちと相談しながら自分たちの小学校の運営をやっていくというそんな感じになっています。だからすべて実は住民がやっているという。それで市の方は、そこに若干の補助金を出している。本当に必要経費といったかんじなんですけど。あとはＮＰＯの人たちがちゃんと仕事をやってくれているか、住民から苦情が出るような仕事の仕方は困るわけです。ですからその辺を一応チェックしてっていう、そのあたりが市の仕事っていう感じです。ですからフランスの農山村地域なんかにいくと、行政の仕事は全て住民がやっている。それは住民からすると結構大変なんですけど、主力になるのは 60 代くらいのひとたちで、仕事はなくなったけれども、まだ体力も何もぴんぴんしているという、それくらいのひとたちが、しょうがないからＮＰＯを３つ４つ掛け持ちという感じで、毎日やっているというかんじですけど。実はこれがいいといって田舎に引っ越してくるひとたちが結構いる。つまり、そうやって自分たちの地域を守ってきて、あの人たちがいてくれるからこの地域が維持できているということが誰の目からもよくわかる。それが今度は自分でいえば、他の人たちから見て、あの人たちが頑張っていてくれるおかげてこの地域がある、守られている、ということになるわけで、つまりお互いを尊重し合う関係が成り立っている。そういうなかに生きていると、ひとりひとりの価値がある生き方ができる。だからそういって農山村に来る人たちが実は結構いる。だから人間的な生き方っていうことの内容は、ひとつは自然があってこそ、だし、もうひとつは地域社会のなかで役割を持ちながら、みんなして地域を守っていく。そういうときに、ひとりひとりが価値ある人間として生きることができる。そういうふうに言っているひとたちが向こうでは圧倒的に多いという感じです。

で、そういうフランスなんかでは、自分たちの地域を、外から来た人たちも含めてなんですけど、本当に持続的に生きる世界に作り直していこうという一種のローカリズムなんですけど、そういう動きが非常に顕著になっていて、イタリアなんかでもそういう傾向が強い。ある時に、南フランスのほうのある村に行ってみたんですけど、夜着いた頃、その時には途中からレンタカーを借りてその村に行くような恰好だったんですけど、着いたら、村のひとたちが、だいたい村のホテルっていうのは夜になると村の人たちのたまり場にもなっているんで、「どっから来たんだ」とかそういう話になるわけなんですけど、「しかじか」と言ったら、下の方にビオという人口３，４万くらいの大きい町があるんですけど「じゃあリヨン通って来たよね」って言ったら「抜けてきた」と、そしたら「ビオの郊外に、マクドナルドのハンバーガーショップがあるけど見てきたか」っていうから僕の方は「知らない」と。「一生懸命車を運転しているわけですから、そんなもん見てこなかった」と言うと、そこにいるひとたちが「それはダメだ」と。「絶対見てこなきゃだめだ」と。「明日見てくるから」と次の日見に行ったんです。そうしたら火事の跡になっていて、焼け落ちたマクドナルドハンバーガーのショップがあった。それで村に戻ってきて「見て来たよ」と言ったら「どうだ、よかっただろ」というもんだから「何が」と言ったら「この地域の暮らしにとって、マックはいらない。だから皆していって火炎瓶なげて燃した」って。「これはかなり過激な町だなぁ」って。結構これはフランスでは有名な事件だったらしいんですけど、何人か逮捕者が出たっていうことですけど。村のひとに言わせると、「別に逮捕者が出たって、村に帰ってくれば犯罪人ではないんだから関係ない」と。その地域っていうのは特に、その地域で採れた食材を使って、伝統的な料理法を使って、伝統的な人間たちの結び付きを大事にして、自分たちの生きる世界を作っている。そういう地域なんで、そこにアメリカのチェーン店なんか入ってきてもらっては困るという。そういことをゆるしているうちに、段々地域社会はおかしくなるという。そういうことらしくて。一理あるような気はするんだけれど、火炎瓶をもって燃すというのもどうか、という話はさておきまして、結構いま、そういうような形で地域主義といってもいいし、ローカリズムといっても良いわけだけど、フランスとかイタリアなんかだと、かなり広がってきています。アメリカなんか見ていくと、アメリカの工業、経済というと、たいてい日本のニュースに出てくるのは、ニューヨークのウォール街のような、金融が仕切っている町、あれがひとつの代表として映像に出てきて、もうひとつは西海岸のほうのシリコンバレーとかグーグルとか、ああいうのが出てくる。それがいわば、新しいアメリカの象徴みたいなかんじで出てくる。最近はアメリカの大統領選以来、アメリカのデトロイトとか旧工業地帯とか、今では錆びついた工業地帯、そういうあたりが時々

ニュースに出てくる、という３つくらいしか出てこないんですけれど、実際にはアメリカでかなり勢力を伸ばしているもののひとつっていうのは、企業を従業員が、従業員たちが、その企業の株を買い取っちゃって、労働者兼オーナーになる。それで、その会社を自分たちで協働の会社に変えていくという。この動きっていうのがアメリカで結構広がってきている。今、アメリカで働いているひとの５％～１０％のあいだくらいは、この従業員共同所有事業体という企業形態のもとで働いている。そこなんかでは、結構経営状態がいいんですけど、なぜかというと、皆の会社にしちゃっているから、その会社というのはみんなの生きる世界でもあって、持続してくれなきゃ困るわけです。持続のためには何が必要かっていうとやはり信頼される仕事をしていくっていうのが一番なわけです。だから消費者と向き合っているような会社だと、消費者から信用され信頼される、そのためにはどうしたらいいかっていうことになるし、それから部品なんか作ってよその会社に売っているような会社でも、やはりいかに使ってくれるところから信頼されるか。それがあることが持続にとっては一番大事。だからみんなして協力しあって、どういうふうにしたらもっと信用され信頼される会社になっていけるかということを皆でやっていく。結果として経営状態がかなり良くなっていく。それなんです。こないだの大統領選挙のときに、民主党の候補で、サンダースっていうひとが結構健闘した。なんで健闘したかっていうと理由はふたつあって、ひとつは、アメリカンドリームに夢を感じなくなった若者たちが増えてきた。アメリカンドリームっていうと、一生懸命働いて、成功していくっていう、成功したっていこうことは、地位が上がっていくか、金持ちになっていくということになるわけなんですけど、気が付いてみたら、アメリカンドリームを追いかけたがために、一人の人が成功する陰で何万人ものひとが蹴落とされていくっていう。だから結局そういうことに過ぎなかったっていうことに気が付き始めていて、自分が成功をして、それでいいのか、ということでもあるし、確率からいえば、蹴落とされる確率のほうがはるかに高いし、それからそういう形で競争していってしまうもんだから、成功しても結局、お金を使うしか楽しみがないみたいな人生になってゆく。はたしてそれが人間たちを幸せにしたのかというそういう気持ちもある。だから、いまアメリカンドリームに夢を感じない若者たちはかなり増えていて、それがサンダースっていう候補を押し上げたっていうことなんですけど、もうひとつは従業員共同所有事業っていう形で、企業運営していっている。会社を単なる労働者を扱って儲ける場にするんじゃなくて、これこそ自分たちの生きる世界があるってみんなで言えるような、企業にもしていく。この仕組みをアメリカで広げていく過程で活躍したのがサンダースであった。ですからサンダースは意外と基礎票を持っていたということでもある。今、アメリカもあの内部では、結構い

ろんな動きがあって、こういう動きというのは実はイギリスから始まっていて、ただアメリカに行って急激に広まったっていう感じなんですけど、だからイギリスとかアメリカだと、こういうような動きをしながら、なんかもう今までのように個人で競争して、豊かになっていくみたいな幻想を持たない人たちが増えてきているのも確かです。

―日本におけるソーシャル・ビジネス、コミュニティ＝共同体の模索

また、日本の場合にも、自分でどっかの地域を母体にして、そこに本当の生きることができる世界を作っていこうという動きもできているし、それからまた、今ソーシャルビジネスっていっても社会的起業っていってもいいんですけど、どういう社会的な使命を実現するために企業を作るのかみたいな、そういう形で企業を作っていくひとたちというのもたくさん発生しているし。特に東日本大震災の復興過程なんかでは、東北地域にたくさんのソーシャルビジネス起業ができて、むしろこれからの地域づくりを目指して、そのためにこういう仕事を作るみたいな、そういう企業の在り方がたくさん生まれてきたのが今でもある。また日本のなかでもコミュニティをもう一度作り直そうとか、そういう活動も広がっている。色んな形で、実は近代の形成期から課題だったはずの、個人の社会なのか、共に生きる社会なのか。その後者の、共に生きる社会の在り方っていうのが、今先進国は色んな形で模索されているふうに思えばいいんだろうという気がしています。

４．ともに生きる世界と伝統回帰

―ともに生きる人間たちの社会

だからこの共に生きるっていう考え方っていうのは、実は近代形成期からすでにあったものに戻ってこうとしているというふうに思ってもいいし、さらに言ってしまえば、それ以前の社会に戻ろうとしているんだというふうに言ってしまっても構わない気がしています。例えば僕の居る上野村ですと、この間村がかなり力を入れてきたのは、９６％が森林ですから、なんとか森と共に生きる村を作りたいという。しかし今、普通に林業をやっていると絶望的なくらい収益性が悪い。それは現実なんです。特にうちの村は戦前には伐採以外の林業はやっていなかった。つまり木を植えたりするようなことはやっていなかった。ですから１００年、２００年経っているような、ものすごい良い木が残っているかと言うとそうでもないわけです。そういう地域で森と共に生きるにはどうしたらいいか。うちの村の場合だと、山のなかで働いているひとが３０人くらいいるので、全員がＩターンというすごい状態ですけれども。村のベテランたちはちょっと違う仕事をしている。木を伐る関係の。あと、相当難しい伐採な

んかが入ってくると指導に行ったりしてますけど、普段働いているのは皆都会出身の人たちっていうかんじです。そのひとたちが年間一万立法くらい木を伐りますので、伐った木は、全量下におろす。うちの村、合併がきらいなんで、農協も上野村農協、森林組合も上野村森林組合という形を守っているんです。上野村森林組合の製材所に運んで、そこで針葉樹は柱とか板にして、広葉樹でいい木が出てくると、うちは木工職人がいますんで、その木工のひとたちに回すような形で製材をしていくという感じです。実際には製材すれば周りが使えなくなりますし、木については、伐った木はすべておろすっていうやり方をしているんで、使えない木っていうのが相当出てくる。だいたい１万立法切ってくると、そのうち６０００立法くらいは使えません。６０００立法は、村の木質系のペレット工場まで運んで、木質系のペレットに変えてもらって、そのペレットを使って、各種ボイラーの加熱用の燃料にしたり、冬が寒いですから、冬の暖房用の燃料にしたり、更にペレットの６割は、発電に使っているというかんじ。そんな感じで、循環的に採算が合う仕組みに変えていこうっていうことをずっとやってきた。で、それやっていると、外からやってきた人にとっては、こんな山の中なのに随分新しいことをやっているんですね、というんですけど、僕らにとってはそんなことなくて、伝統回帰です。昔は地域エネルギーで暮らしていた、その証拠が薪だった。あの時代に戻ろうとしているだけなんです。地域経済も、地域のなかで循環していく度合いを高めていく。これも昔に戻そうとしているだけなんです。ただ昔に戻すって言うことをやるときに、昔の形態のままで昔に戻そうとすると逆に戻らなくなっちゃう。そこでは、新しい技術も使うし、コミュニティの作り方なんかでも新しい要素もどんどん入れていくし、だけど「コミュニティと共に生きる社会を作る」っていうのは伝統回帰。うちの村はコミュニティがしっかりしていますんで、むしろそれを守っていけばいいという感じなんですけど。だから、今の世界で起きていることは、実はかなり伝統回帰で、いろんなところでコミュニティを作ろうという動きが出てくる。なんてことはない、昔はすべてのひとがコミュニティと共に生きていた。あの時代に戻っていくだけの話。

―自然と生者と死者のともに生きる社会

それからいま自然と共に生きようということがさかんに言われているけれど、それだって昔に戻っているだけの話なんで、伝統回帰といってもいいし。だから色んな形で、近代の綻びを新生していこうという動きが、ある種の伝統回帰として起こっていると僕は思っているわけです。ただし、伝統に戻ろうとしたときに、昔のカタチに戻そうとすると戻る事ができない。だから江戸時代のカタチに戻ろうなんていくら言ったって、そうとはいきませんっていう話になるだけで、だからコミュニティを作って共に生きようというのは伝統回帰だけれ

ど、それをやろうとすると社会の在り方は違っているし、人々の暮らし方も違っているわけですから、現在のコミュニティの作り方を見つけ出さなければならない。それから自然と共に生きるのだって、昔は人間の８割９割のひとたちは田舎でお百姓さんをやっていきていたわけですから、自然と自然のなかで生きていた。だけど今みたいに都市人口が圧倒的に多い時代になってくると、そういう時代における自然と共に生きるっていうことをやろうとすると、やはり新しい発想で色んなことを考えていかないと伝統に戻ることができない。多分これからは日本の社会ていうのは、伝統的には自然と人間の社会というふうに捉えられてきたし、それから人間もまた生きている人間だけじゃなくて、自然と生者と死者の社会と捉えられてきた。だから死者もこの世界の構成メンバーという考え方だったんですね。このあたりもまた議論していく必要があるんだろうと感じています。日本の場合って、今でもそうですけど、例えば家族が亡くなった場合でも、亡くなっても居なくなっちゃったって思わない。むしろ居なくはなってるんだけど、自分との関係の世界のなかには今も存在している。そういうふうな捉え方をしている人のほうがむしろ多い。

―伝統社会の考え方からヒントをもらう時代

これは日本の伝統的な発想で、関係がある限りは、死者であれ何であれ、相手がそこに存在しているという発想が日本にあったわけで、こういう考え方はこれから議論していく時代に移っていくんじゃないかなという気がしています。地域社会の作り方自体は、地域によって違うんで、おそらく豊田市には豊田市の作り方、ここにはなんたって、世界に冠たるトヨタがあって、しかも都市部も存在している、そのなかで都市と農山村地域をどう結び合いながら地域を作っていくかが課題になってくるでしょうし、上野村では、この足助の町並みほどの町もない、商店街も存在しない。そういう地域における地域の作り方っていうのは、やっぱり豊田と同じことを考えていてはまずい。それぞれの地域が自分たちに合った独自の発想で、方向性を見つけ出すのがこれからの課題って言ってもいい。

５．ともに生きる都市と農村漁村をめざして

―循環的な地域、外部との結びつきの上に成立する地域

だから都市との結び付きっていう点でも、上野村は外部のひとたちは東京のひとたち、東京じゃなくてもいいですけど、そういうひとたちに開いた村を作っていく。そういう人たちと一緒に村を作る。そういう方向性を絶えず追求していかないといけないし、だけど豊田だったらば真ん中に都市があるわけですから、また違う発想をしてやっていく。

６．まとめに代えて
―ひとつの時代の終わりのなかで

これからの時代っていうのは、やはり個人が競い合っていくモデルで豊かになろうとした時代は、地域の特徴がなくなっていくし、それから関係の在り方も同じようなものに飲み込まれていく、そんなことが続いた。これからはそうじゃなくて、もう一度共に生きる世界を作りなおそうという時代に移っていて、それは共に生きる生き方が地域によって違うし、それぞれの地域が非常に特徴を持った地域の作り方、みたいなことをしていかなきゃいけないし、そういうことを目指していこうとすると、おそらく一番大きな力になっていくのは、はっきり言って、行政ではなくて住民だろうという気がしている。行政っていうのはある程度皆を平等に扱っていかなきゃいけないんで、特徴のあるものだけに入れ込んでいくのは苦手な仕組みになっている。うちの村のように１０００人ちょっとしか人口がいない村になってくると、行政も住民もないみたいに一体的に動くことができたりもしますけど、一般的な行政はかなり難しい。そうすると、やはり住民自身が自分たちの地域の方向性を見つけ出す、しかもそれをある程度実践しながら、行政とも協力関係を結んでいく、そういうことがこれからとっても重要な時代に入っていくんだろうという気がしています。